

創刊をよろこぶ

斎藤 茂 太

わが協会もついに「風天ニュース」を発行するに至ったかという深い感慨にひたっている。というと、いささか大時代的な表現のようだが、ひとつの団体の発展の姿をみると、それはどうやら「活字」と平行関係にあるように思われる。

「ニュース」がページ数を増し、やがて新聞形式になり、そして雑誌型に変化する。その頃には、その団体は押しも押されもせぬ一流の団体に発展している。これがふつうにみられる流れである。

ただ、その「活字」が人びとに愛され、次の号が待たれるようにならなければ、その「活字」が発展しないことは当然である。私の1日は夜の床入りで終る。いやまだ正式には終らない。まだひとつの仕事が残っている。それは本を読むことだ。そのことで、私の心身を終日むしばみ、酷使し、へとへとに疲労させた元凶であるストレスを解消しようとする。したがって、その本は、身近にある本のなかで最も楽しく、最も好ましく、最も心の琴線に触れるものでなければならない。読んでいるうちに、次第に睡眠中枢が機能してきて、私はその本を抱くようにして「神のごとく」眠りに入るのだ。

この「ニュース」が私が1日の終りに読む「活字」になることを信じ、かつ、そうなるように力を注ぎたい。

むかしに比べて「航空ジャーナリスト」の数は大幅に増えている。航空マニアの数も段ちがいに増えた。だが、浜松の「ブルー・インパルス」事故の直後、あるパーティで私はおもに女性から「どうしてアクロバットなど必要なの」という質問に悩まされた。

われわれの仲間のなかには、立派な航空史家もいるし、航空評論家もたくさんいる。戦前よりもはるかにレベルは上っている。しかし、少し淋しいことは北村小松さんのようないわゆる航空作家がほとんど見当たらないことだ。もうそろそろ、日本にもサン・テグジュペリが出現してもいいし、「ボーイング・ボーイング」（フランスの芝居だから、ボアン・ボアンだ）のような軽妙洒脱な芝居を書く人が出ていいと思う。西村京太郎氏のような乗物と時間をからめた推理小説を書く人が出てもいいと思う。

本ニュースの創刊をよろこぶとともに、今後の限りなき発展を祈念する。

温 故 知 新 (1)

野 沢 正

西新橋交叉点の近くにある航空会館は、昭和53年の竣工で、以前の古い建物は飛行館と呼んでいた。飛行館は昭和4年の竣工で、初代館長の長岡外史陸軍中將は熱心な飛行機ファンであり、飛行館の1階ホールを「飛行機陳列場」とした。日本最初の実質的に価値ある航空博物館であった。

私がここを初めて訪れたのは昭和10年で、1階ホールのまんなかにフランス製のドボアチヌD1C1戦闘機（実物）が置いてあった。大正13年に陸軍が三菱を経て試験的に1機だけ購入した日本最初の全金属製モノコック流線型胴体の珍機で、複葉戦闘機全盛時代の革新機であった。

この戦闘機を中心に、前側、左側、後側には、陸海軍現役の各型軍用機および民間機の立派なスケール・モデルや各種発動機、プロペラ（実物）などが所せましと並び、外国航空会社の美しいポスターなども貼ってあった。そして右側（大通り側）には日本航空輸送株式会社の切符売場があって、この玄関前から羽田東京飛行場行きの乗客用車と航空郵便を運ぶ三輪貨物オートバイが発着する仕組みになっていた。つまり市街地の航空博

物館の玄関から空港に直行する無料サービス車が出ていたのである。

この展示ホールには中2階と称する廻り廊下があって、ここにも下のホールに飾りきれない古飛行機の部品や貴重な史料などが置いてあったが、その奥の一隅に「東京飛行記者倶楽部」という名札を掲げた小さな部屋があった。新聞社の飛行担当記者や、雑誌記者の「たまり場」で、立派なヒゲをつけた紳士風や壮士風の男も出入りしており、私にはこの中2階がいちばん興味あるところに見えた。雑誌「飛行」の北尾亀男、「航空時代」の渡部一英の両リーダーをはじめ、ときには有名パイロットや作家も姿を見せていた。航空ジャーナリストの情報伝達交換の場であり、また将棋や碁盤も置いてある憩いの部屋でもあった。

将来、日本に国家的規模の航空宇宙博物館が完成したときには、その一隅に、出入り時間に制限のない情報公開、飲み喰い自由な航空ジャーナリスト協会々員のための、実益と研修と憩いの場を兼ねる「たまり場」を設けたいものである。